

# 東京湾湾口部における浅海域の仔稚魚相

丹羽裕介・<sup>○</sup>茂木正人・長岩理央・河野 博 (海洋大)

キーワード：東京湾，浅海域，仔稚魚相，中深層性魚類

東京湾湾口部に位置する館山湾において、仔稚魚相の特徴を明らかにする目的で、口径 1.3 m、目合 0.33 m のプランクトンネットを用いたサンプリングを、2003 年 9 月～2004 年 6 月まで隔月で行った。採集場所の水深は 20～40 m で、サンプリングは 0～10 m 付近で行った。

採集された仔稚魚は 64 科 115 種以上からなる 26,147 個体であった。個体数で最も多かったのはカタクチイワシで、20,969 個体 (80.2%) が採集された。その他にはネズッコ科 (826 個体)、ハタ科 sp. (329)、ボラ科 sp. (295)、ハダカイワシ科 spp. (276)、サバ属 spp. (245)、アジ科 spp. (235) などが多く採集された。個体数は 4 月にもっとも多く 54,851 個体/1,000 m<sup>3</sup> で、少なかったのは 2 月で、96.2 個体/1,000 m<sup>3</sup> であった。種数は 10 月に最多の 59 種を記録し、2 月には 4 種のみであった。

成魚の生息場所に基づいて採集された種を 6 タイプ (沿岸性 (砂泥底, 岩礁域, 砂泥底), 表層, 大陸棚, 中深層)) に分けたところ、沿岸性タイプがもっとも多く、全体の 60% を占めた。中深層性タイプが次に多く 22.3% を占めた。湾奥で行った同様の研究では 80% を沿岸性タイプが占めており、

中深層タイプは 2% に過ぎなかつた。また湾口部の沖合 (水深約 850 m) や相模湾の中央部 (水深約 1,500 m) で行った研究では、大陸棚タイプの占める割合にバラつきがあるものの、概ね本研究と同じ結果が得られている。

さらにタイプ組成の季節変化をみると、12 月に中深層性タイプが 50% と大きな割合を占めた。また表層性タイプは 2～6 月に大きな割合を占めた。一方、相模湾中央部では中深層性タイプが 12 月に 27% を占めたものの、1～4 月にかけてはまったく出現しない。

以上のことから、東京湾湾口部の浅海域が、沿岸性魚類をはじめ、表層性、大陸棚性、中深層性などさまざまなタイプの魚類仔稚魚の生育場となっていることが明らかとなった。さらに、中深層性魚類の仔稚魚が冬季から春季にわたり沿岸の浅海域を生育場していることが示唆された。